

宜野湾市の沿革



市章は「ギノ」を図案化したもので「ギ」で躍進の翼を形どり、円で湾を表わし、協力の和と平和を表わす。
(昭和42年6月制定)

面積

19.80平方キロメートル
(令和3年6月30日現在)

人口密度

1平方キロメートルあたり5,060人
(令和3年6月30日現在)

世帯数

46,117世帯 (令和3年6月30日現在)

人口

100,194人 (令和3年6月30日現在)

位置

本市は、沖縄県本島中南部の東シナ海に面し、北には北谷町、東には中城村、北東には北中城村、南東には西原町、南に浦添市と面しています。

那覇市より北に12km、沖縄市より南に6 kmの地点にあり、市内をドーナツ状に国道58号、国道330号、県道宜野湾北中城線、県道34号が通り、さらに沖縄自動車道の北中城インターチェンジ、西原インターチェンジへもつながり容易な沖縄本島の中部及び北部を結ぶ交通上の重要な地点に位置しています。

歴史

本市の母体である宜野湾間切は、寛文11(1671)年に首里王府によって浦添間切から我如古、宜野湾、神山、嘉数、謝名具志川(大山)、大謝名、宇地泊、喜友名、新城、伊佐の10村を編入、中城間切から野嵩、普天間、そして北谷間切から安仁屋をそれぞれ編入し、新設された真志喜を含め14村で設立されました。

明治12(1879)年の廃藩置県後、字宜野湾に中頭役所が置かれ、また普天間に県立農事試験場が設立されました。さらに中頭郡教育会がたびたび宜野湾で開かれるなど、本島中部の政治、経済、教育の中心地として活気を呈していました。

第二次世界大戦においては、本市も壊滅的な戦災を被りましたが、野嵩地域が焼失を免れて、宜野湾以南の戦闘地域の民間人の収容所となり、宜野湾の戦後復興の中心地となりました。その一方で、戦中から戦後にかけて市域の主要な部分が米軍基地として接収され、基地のまちとしての性格を強めました。また、普天間を中心に都市化が進展し、昭和37(1962)年7月1日に市制が施行され、宜野湾市が誕生しました。

現在、西海岸地域においては、マリーナやビーチをはじめ、コンベンション施設、大型商業施設やリゾートホテルが立地する観光リゾートエリアとしての機能も有しており、平成27年に返還された「西普天間住宅地区跡地」では、琉球大学医学部及び同病院の移設を含め、今後返還される基地跡地利用の先行モデル地区として、沖縄県内の中核的役割を担う都市として成長発展を遂げています。

